

第Ⅱ部 研究報告（要旨）

「気づく」

「支援する」

生徒理解と相談体制の充実 学力とコミュニケーション力の向上 個別の指導・支援

まず、間人分校では、中学生に適切な学校選択をしてもらえるよう学校見学会や合同入学説明会を実施しています。学校見学会は、希望者の都合に合わせて、生徒本人だけでなく保護者や中学校の先生にも来てもらっています。



間人分校は、さまざまな教育活動を「気づく」⇒「支援する」⇒「送り出す」流れとして体系化し、自立した社会人の育成をめざしています。

第一の「気づく」の段階ですが、入学した生徒の理解を促進するために、中学校との連絡会を3、6、9月に実施しています。



入学生の基礎学力を把握するために、国語・数学・英語の基礎学力診断テストを行います。漢字が正確に書けない、たし算とかけ算を混同しているなど、具体的な実態の把握に努めています。併せて、授業スタートアンケートを実施し、「先生の話聞くこと」「黒板からノートに写すこと」「教科書を読むこと」などの項目について「得意ですか？不得意ですか？」と問いかけ、一人一人の授業における「困り感」を把握するようにしています。

一年間に5回の面談週間を設定し、これを個別支援の入口としています。会話が困難な生徒には、筆談や交換日記などの方法で生徒との意思疎通を図っています。また、今年度から hyper-QU 検査を導入しました。生徒理解を促進し、よりよいクラス作りに役立てています。はじめての取組ですので、教職員研修会を実施し、全教職員の共通理解と情報の共有を図りました。

2週間に一度、担任会を開き、各学年の取組と生徒一人一人の様子について情報を交換しています。気になる生徒の指導の方向性を見出すなど、とてもよく機能しています。担任会を受け、全教職員による「まなざし会議」を行い、学校全体の短期目標（あいさつの励行、みだしなみを整えるなど）を設定し、日常的な課題の改善に取り組んでいます。

1年生から3年生までを対象に職業適性検査を実施しています。紙筆検査だけでなく器具検査を行い、個人の特性や職業適性を把握し、進路指導に活用しています。

間人分校では、全教員が全クラスの授業を担当しています。これをメリットとして最大限に活かし、全教員による気づきアンケートを実施しています。生徒一人一人の困りや特性を全教員で共通理解し、個別の指導・支援に活かしています。

入学当初に行う養護教諭との教育相談を皮切りに、スクールカウンセラーや専門機関への相談につないでいます。スクールカウンセラーは、2週間に1回で、1回あたりが6時

間となっています。特別な教育的支援を要すると考えられる生徒については、「丹後地域教育支援センターよさのうみ」の巡回相談を活用しています。その結果、療育手帳を取得し高等技術専門校に進学したケースや「医療・福祉」機関との相談につながったケースがあります。特別な教育的支援を必要とする生徒については、毎月行う学校教育相談会議で情報共有をし、一致した対応に努めています。「漢字が読みにくい」「言葉が出ない」「運動が苦手である」など、学習上の配慮が必要な生徒については、個別の指導計画を作成し、組織的・計画的な対応をしています。ほとんどの教科において教員数が1名であるため、学校全体で取り組まなければ、指導内容を充実させることが容易ではありません。

第二の「支援する」取組の特徴的なものとして、3つ紹介します。

一つ目は、ふりスタと間人式検定です。基礎学力診断テストの漢字の書き取りの結果を分析すると、小学校3年生以降の問題の点数が極端に低くなっています。他の教科においても、同様の傾向が見られます。間人分校では1年生を中心に、全教科での振り返り学習を行っています。特に、国語・数学・英語については総合的な学習の時間を活用し、週に一時間、授業の復習とチェックテストを実施しています。これを間人式検定としてシステム化し、成績優秀者を「マイスター」として表彰しています。

二つ目は、授業のユニバーサルデザイン化です。ユニバーサルデザイン化とは、生徒の学習上の困りを軽減するための授業改善です。学習上の困りのあるなしに拘らない、すべての生徒に役立つ支援でもあります。ユニバーサルデザイン化の大きな柱は3つあります。「視覚化」「構造化」「協働化」です。たとえば、多くの教科で授業をパターン化するとともに授業の流れを明示していますが、これは生徒に見通しを持たせ、緊張感やとまどいをなくする工夫です。ユニバーサルデザイン化を効果的なものにするためには「一定の秩序と安心感、一貫性」が必要です。そのために、並行して授業中のルールを徹底させる取組を行っています。「机上の整理」「立ち歩きなどの動きのコントロール」「発言のルールの徹底」の3点を重点的に取り組んでいます。こうした取組により、生徒向け学校評価アンケートでは、生徒の9割が「先生方はわかりやすい授業をしている」と答えるようになりました。

三つ目は、コミュニケーション力の向上です。インターンシップの受入れ先から、「挨拶ができない」「声が小さい」「自分から尋ねることができない」などの指摘をいただきました。つまり、言葉のキャッチボールがうまくできない弱さが課題として浮かび上がったのです。自己表現レッスン、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、自分の気持ちを伝えられる、相手の気持ちを理解できる力を育成します。コミュニケーション力の育成の取組の一つとして、今年度から1年生の総合的な学習の時間を利用して、週に一時間「つながる力向上プログラム」を実施しています。今年度より始めた新しい取組ですが、愛知県立刈谷東高等学校の兵藤友彦教諭の「演劇表現」の実践など、先進校の取組を導入しながら、他者に対する気づきや信頼を育てる試みを実施しています。

定時制通信制の高等学校では、生活体験発表大会を実施しています。各学校の代表生徒

による都道府県大会と各県の最優秀生徒による全国大会があるのですが、昨年度までは府大会に出場する代表生徒を指名していました。今年度からは、生徒に自分自身を見つめ直させ人間的な成長に気づかせたい、人前で発表する力を身につけさせたいという思いから、4年生全員による校内予選を行うことにしました。それぞれが困難や課題を克服してきた自分を再確認し、これからの人生の糧にすることができたと思います。

間人分校は、社会人講師を活用し、生徒にさまざまな経験をさせています。茶道体験、短歌講座、自己PR力向上講座、アコースティックコンサートなどです。最後に、短歌講座の中で、生徒が作った作品を一首紹介します。

「友だちと仲良く海でさわいだら帰りはずっと笑い合うんだ」

人とのコミュニケーションの在り方を端的に言い表していると思います。

「送り出す」 進路実現のために

進路指導部の取組を4つに分けて報告させていただきます。

報告の内容は、学年別の進路指導計画について、2年生の企業見学について、3年生のインターンシップについて、そして生徒の進路実現を促進するための進路連携会議の取組についてです。



本校の進路指導は、まず、1年生の段階では自己理解です。担任面談を繰り返しながら、自分自身の得意なことや不得意なこと、適性について理解を深めていきます。次に、2年生では、企業見学や分野別ガイダンスを通して、働くことの意義や職業について考えます。3年生では、進路実現の力をつけるため、インターンシップを中心に取り組みます。そして、4年生では、いよいよ進路実現の援助です。

2年生の企業見学ですが、こうした取組も必要だということで、今年度から始めました。京丹後市内の総合老人福祉施設、鉄工所、自動車関連工場を見学しました。老人福祉施設で職員と利用者がふれ合う姿を見るとか、工場で大きな音や振動を感じるという体験が、テレビで見たりするのは違い、強い印象をもち、「働くとはこういうことか。」と実感できるようです。

3年生のインターンシップですが、生徒の発表にありましたが、7月に3日間、実際に仕事に行きます。事前に書類を書いたり、挨拶に行ったりして、そういう場面でどのようにしたらいいのかを学びます。職場には教員が見に行きますし、体験の様子を踏まえて、生徒とより内容のある話をするにもつながります。生徒の発表にあったFMたんごでは、実際に放送をしましたので、「ええ声しとったやないか。」と励ますこともできました。インターンシップは、今年3年目で、ようやく定着してきたかなという感じですが、もう少し、体験を増やしたいという生徒もいますので、企業にお願いをして受け入れてもらっています。

4年生の進路実現ですが、求人票の中から選んで応募するというやり方では進めること

がむずかしい生徒について、特別支援教育コーディネーター、生徒支援コーディネーターと協力して、ハローワーク、障害者就業支援センター、市役所の担当課に出席してもらい進路連携会議を開きます。協力体制を作った上で、個々のケースについて、保護者も交えてどういう進路の方向がよいのかを相談します。

この他の取組として、3年生では社会人講話を実施しています。今年度は、3回、地域で工場を経営する社長さん、旅館の女将さん、美容師をしている卒業生にお願いしました。社長さんは、ざっくばらんに声をかけて生徒の反応を見ながら話をしてくれましたし、女将さんは旅館を経営する苦労や人をもてなすということについて話をしてくれます。卒業生は、これからの取組となりますが、高校と職場との違いを教えてくれると期待しています。

3年生を終えた春休みに、保護者にも来ていただいて4者面談をします。そこで、希望の進路を尋ねたりしながら、考えを深めさせ、具体化させます。4年生になると、履歴書の書き方を教え、書いたものを直させ、何度も面接の練習を繰り返します。面接練習で生徒は、はじめは「何を言われるのか。」と嫌なようですが、繰り返すうちに、自分からしてほしいと言うようになります。そして、自分に足りないところは何か、そこに気づきながら直していっています。細かいことですし、生徒にとってはストレスになることかもしれませんが、いろいろな先生に支えられながらやっています。

選考がすんで、不調ならそれで終わりということではありませんし、何度でもチャレンジできるよう指導します。合格した生徒も、今のままでいいのかということで、力を高めさせるようにします。毎日の指導の中で、少しでも生徒を良い方向に導くよう努力しています。

教職員のスキルアップ 教職員研修会と先進校視察

本題に入る前に間人分校の職員の年齢構成ですが、我々4人の部長は年が大きいです。残り半分は、大体20代か30代でとても若いです。我々にとってもそうですが、いくつもの研修の機会があり、若い先生たちは本当に力をつけたと思います。

さて、校内研修の目的ですが、大きくは、生徒のコミュニケーション力の向上、発達障害の理解と支援、研究授業による授業力向上の3つです。研修内容は、10項目あり、外部講師やスクールカウンセラーなども積極的に活用しました。

「今、ここにあなたといることレッスン」というのは、生徒の発表にもありました「演劇表現」の実践を学んだものです。生徒のコミュニケーション力の向上ということですが、私は、割り箸を使ったペアワークが成功しませんでした。成功したから、相手のことがわかるということでもないと思いますが、心をつなげようとする努力はしたと思います。相手のことを思うことが大切だということに気づきました。



「障害の理解と支援の基本」「授業における特別な教育的支援」ということで、京都府総合教育センターの大森先生には何度も来ていただきました。発達障害のある生徒がどんな困り感を持っているかであるとか、どのように接したらいいのかを教えてくださいました。私も、ある生徒と話をすると、大森先生のお話を思い出して、ゆっくりと柔らかな口調で話をすると、ずい分、内容を深めることができました。研修の中で、大きな気づきがあったということが非常にありがたかったと思います。大森先生の他にも、多くの先生に授業を参観していただき、授業改善を進めることができました。

佛教大学の菅原准教授からは、特別支援教育について丁寧に教えてくださいました。特に、今月の始めに、3名の学生さんを連れて来ていただき、教育実習やボランティア活動での経験を聞かせてもらったり、間人分校のことを聞いてもらったりして、交流を行いました。日頃、大学生と話したりすることはありませんから、新鮮な気持ちでいろいろなことを再認識することができました。

スクールカウンセラーからは、本校生徒のカウンセリング事例に基づいて、発達障害の特性理解や支援、ソーシャルスキルトレーニングについて、細かなところまで話をさせていただきました。

先進校視察ですが、ソーシャルスキルトレーニングやキャリア教育、柔軟な教育システム、ユニバーサルデザイン化について学んだり、学校相互の交流を行いました。まず、ホームページ等で視察先のことを調べ、実際に見学をして話を聞き、帰ってから校内で報告を行います。全国各地、広島県、四国、愛知県、富山県、北海道の定時制の高等学校、特別支援学校に行っております。

定時制高校では、働きながら学ぶ場から変化をしている。今は、学ぶことも働くことも支援しなければいけないという話を聞きました。また、不登校などいろいろな事情があって、学び直しをさせることが現在の定時制の重要な役割であるという話を聞きました。さまざまな課題を持つ生徒に配慮して、二部制・三部制、単位制、定時制であっても3年間で卒業できる仕組みなど、柔軟な教育システムを整備している学校が多かったです。授業のユニバーサルデザイン化も進めておられましたし、これは特別支援学校も含めてですが、ジョブサポートティーチャーを活用して地域の企業と連携を深め、就労支援に取り組んでおられました。